

降る雪に身をまかせ

伊奈かっぺい

INA Kappei

■プロフィール:

1947年青森県弘前市生まれ。ラジオパーソナリティ。ラジオ・テレビCMキャラクター、ディレクター。詩人、イラストレーター。青森放送に勤務する傍らのタレント、創作活動を行っている。自作の詩の朗読、歌などCD多数。津軽弁での方言詩集、エッセイなど著書多数。
最新刊「あれも うふふ これも うふふ」(草思社)



降る雪に身をまかせ

伊奈かっぺい

Consent tent 2028+
地産地消推進員 伊奈かっぺい
2006.4.26

2
地吹雪——広辞苑第五版を取り上げてもらったから急に吹き荒れたのではない。現実が言葉よりも活字よりも早い。地吹雪をブリザードと説明する国語辞典の寒さはこの際、雪に埋めといて。さて、降り積もる雪だ。雪は降る。雪は積もる。積もられては何かと不覚だが、傍に寄せられる分は寄せ、寄せられない分は踏み固める。湯水を利用して溶かすなど、一部の特殊な場合を除けば、降り積もる雪に關してはそれだけすべだったし、今もそれがすべとあって良いだろう。

寄せあふ含む片付け方、格段の進歩があるのだと、意見もあるが、それを人間の知恵と呼んで良いのだろうか。単なる化石燃料と重機との組合せとしか思えないのはなぜだろうか。少くとも私に言わせれば、力づくで採伏せよというの解決、あるいは進歩と思わせるようなやり方を「知恵」と呼びたくない。

人工降雪機とはよく考えたものだが、今の

3
今となっては、降らないでほしい所に降らないようにする「道具」を考え出すことが本当の知恵ではないだろうか、と思ったりも。焚き火の残りから炭を見つけたのと、地べたから石の炭やら泥の炭を見つけたのとはどちらが先だったのだろうか。いずれ、ここまですべて発見。そしてその炭の粉を丸めて豆炭、練って練炭、これが知恵。

炭の転がり様は知恵として、わかるような気もするが、油の流れは私が思う知恵では逃いっけない。炭はアナログで燃え、油はデジタルで燃えているようだ。

とリあえず、時代がどう変わろうと雪の降り方に変わりはない。練り返すようだが、こちら何も変わっていない。積もらせておくか、積もらせるか踏み固めるかだ。それで良いではないか。寄せる知恵、踏み固める知恵、知恵くらいで接していれば可愛いものも、力づくで採伏せよとした時、向こうも何かを避えてくるに違いない。だから……

雪は降る。あなたは来ない——とは、よく言ったものだ。それは雪にとっても、あなたにとってもだ。あなたは、あなたであり、あなたは私でもあるのだけれど。

私の見知る限り、せいせい五十年。聞き及んだ今としてあと五十年くらいを上乗せしておいても良いだろう。

せりや、降り積もる側にしてみれば、少しばかりを越えた進歩があったような気にもなっているだろうか。降り積もる側にしてみれば何ひとつ変わってはいないはずだ。

地球温暖化——言葉としては知っているつもりだが、今の冬、その前の冬をこの地で暮しているが、それを実感したことは一度もない。さても温暖化を思わせるような吹雪とはどんな吹雪だろうか。

地吹雪——降り積もった雪が地を這うように激しく舞う。時々、前が見えなくなるのではなくて、時々しか前が見えない状態とでも言うっておこうか。